

# 12月24日付神奈川新聞紙上 経済欄にて、新井理事長インタビュー記事掲載

横浜・関内地区の新たな将来像を  
考えようと、同地区の企業関係者ら  
有志が集まり、今年8月に一般社団  
法人「関内活性化会」を立ち上げた。  
理事長に就いた、地元の実業家・  
新井清太郎商店の新井英輔社長に、  
設立の狙いや目指す街づくりの方向  
性などを聞いた。

(聞き手・吉田 勝行)



— 設立の経緯を。  
「横浜市内舎の移転決定を契機に2016年10月、関内エリアを中心に空室増加を懸念するテナントビル事業者を募り、『関内活性化委員会』をつくった。そこに至る経緯としては、関内・関外活性化協議会の北村宏さん・キタムラ社長から関内エリアの活性化に協力してほしいと連絡があり、相談した鶴岡博さんが元横浜スタジアム社長・故

## 関内活性化会

## 新井 英輔理事長



あらい・えいすけ 1974年、貿易商社「新井清太郎商店」(中区尾上町)入社。常務、副社長などを歴任し、2008年10月から社長。76歳。

# 健体康心の街づくり

人々が背中を押してくれたのが発端だった」

「その後、関東学院の進出や、横浜文化体育館の再整備といった新たな動きが出てきた。テナント業としては営業していくだろうと判断し、委員会は発展的に解散した。今度はエリアマネジメントに注力するため18年3月、関内活性化会協働組合に改組して再出発した。ただ、任意団体だったので、もっと制約なく活動できるように法人化した」

— 活動の目的は。  
「主な目的は、健康な体で

88年)創業の当社は、初代がここに倉庫を建てたのが原点。戦争では焼け野原になった。いま首都高が通っているところは運河で、当社の倉庫からはしげで運河を渡って本船まで運んでいた。関内は時代に合わせて変わってきた。市庁舎がいなくなっても、出直せばいい」

「関内エリアは交通の便が良く、人の動きもいいので、オフィスビルでなくてもいい。当社所有の古いビルはリニューアルして芸術家などが使っている。どういった街にしたら、どういった利用ができるのか。新たな展開をもつ一度、馬車道商店街や関内桜通りの関内まちづくり振興会などとも相談しながら、前向きに考えていきたい」

「昔は危険な街のイメージが強かった米ニューヨークのブルックリンを今春訪れた。昔ながらのビルはそのままだが、ブティックなどいろいろな店になり、街並みが大きく変わっていた。ビルの屋上でオーガニックの野菜を作るなど、住んでいる人たちが楽しむ街に変わった。それをコピーするという意味ではないが、そういうことはあり得る。協力し合えば、東京とは違った街づくりができると思うている」

— 改めて抱負を。  
「いまある街を、どのように新たに展開していくか。すでに住民も大勢おり、ドラッグに変わると迷惑になってしまう。時間は相当かかると思うが、一歩ずつ、やっていかなければならない。われわれの目標は『愛するこの街』を次の時代に渡すこと。理事長として精いっぱい努力したい」

心安らかになる『健体康心の街づくり』。関内にはオフィス、マンション、飲食店等があり、元気に仕事ができ、生活できる街を目指している。SDGs(持続可能な開発目標)などもいち早く導入していく」

— 市庁舎移転への危機感は大かと思うが。  
「危機感を持っていない。ここに最初から市役所があったわけではない。横浜が開港し、関内の内側に外国人居留地や商館ができた。それが関内の発祥。明治21年(18